

いささか論点の出し方が抽象的で、教師と生徒のポジショナリティの違いと、人間としての対等性・平等性の問題とがごっちゃになっているために、空中戦のような議論にならざるをえなかった。私はとりあえず次のような話で議論をまとめた。

「教師は好むと好まざるとにかかわらず「権力性」を帯びた存在である。また、教師と生徒の関係は、もともと「指導する側」と「指導される側」という非対称の関係でもある。しかし、生徒を固有の人権を持つ今を生きる同じ人間として捉えたときに、学校的な価値は相対化され、今、その生徒に必要な指導とは何かが見えてくる。これは学校を、世界を変えることにつながる大きな気づき、発見でもあるだろう。教育を「ケア」の行為としてとらえたとき、「ケアするものがケアされる」という「ケア」の「相互応答性」、言い換えれば、どんな関係性、どんな社会づくり、世界づくりをめざすかの相互の学びが発動するのではないだろうか」

ただし、これも学生たちにはかなり難しい話で、たぶん「煙に巻かれた」感が残ったのではないかと思う。同じ時間に実践記録の中で生徒たちが苦労して作りあげた「オズの魔法使い」のDVDを鑑賞したので、学生たちの振り返りはDVDを観た感激で埋め尽くされ「煙に巻かれたこと」への不満はどこかへ吹き飛んでしまったようだった。

- ・英語劇は本当にあんなに揉めたクラスとは思えないチームワーク、特に音響とのタイミングは素晴らしかったですし、何よりとても楽しそうでこちらまで嬉しくなりました。生徒はこのように大きなことを成し遂げる可能性、素質が本来備わっているものと考えました。教師が

すべきことは、その可能性を惜しみなく発揮できる、そういった場の形成をサポートすることだと感じました。

- ・オズの国の生徒たちの劇を見て、意見にもあったが問題のあったクラスの生徒たちがみんな一生懸命真面目に、楽しそうに演じていることに感銘を受けた。正直定時制の学校には少し偏見を持っていたところがあるが、見方ががらっと変わった。もしかしたら普通科の高校生よりも熱心に取り組んでいたんじゃないかとも思った。
- ・オズの魔法使いを観てホッとしました。裏側、苦勞した側を先に見たので実際しっかり演技はできているのかという不安からのものです。ですが観ると杞憂に終わる所がちゃんと感情表現できてるなと感嘆しました。教師を目指すというのはこの見えない部分をケアし成長する手伝いをするに果たすべきひとつの役割を担っているのかなと思いました。

DVD から流れている映像と音声を、学生たちはまるで自分が実践者になったか、クラスの一員であるかのようにハラハラドキドキしながら当事者意識で見て聞いて感じていた様子であった。

「浅田正登は私です。」という最後のカミングアウトには、学生たちは無言で応答した。私は、「反応、薄ス！」と少々拍子抜けしたが、後で聞いてみるとあまりの驚きに声が出なかったのだという。

(3) 「生徒指導」の定義をめぐって

「生徒指導」とは何か、というトピックでは、まず学生たちに、「生徒指導」ということばのイメージを、自身の体験を参考にしながら言語化してみるという作業をグループ単位で行わせた。出てきたものは予想通り、「悪いことをした生徒を教師が厳しく叱り飛ばす」「停学・謹慎処分」「集会で

の先生の注意・お説教「頭髪・服装検査」というものであった。学生たちが「生徒指導」という言葉にかなりネガティブなイメージを持っていることを改めて確認できた。

続いて、文科省が教員向け「生徒指導」の基本書としている「生徒指導提要」が示す、次のような「生徒指導」の定義を提示した。

「生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のことです。すなわち、生徒指導は、すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指しています」

かつては、「生徒指導」を「各教科の指導」とは切り離れた「教科外の指導」の枠組みでとらえる傾向にあったが、最近では、授業も含めた学校での教育活動全般にわたる指導としてとらえるようになってきている（文科省）と言われるが、実際、この定義だけみると「学校教育」そのものの定義といかほどの違いがあらうかと慮る。案の定、自分たちの学校歴から抱くネガティブな「生徒指導」のイメージとのギャップに驚いた、という感想が学生たちからたくさん寄せられた。

本来、豊かな人格を育て学校を有意義で充実したものにするための「生徒指導」が、「取り締まる」「規則を守らせる」とか「問題を起こした生徒を反省させる」指導と同義語のように使われるは何故なのか。「消極的生徒指導」＝「問題行動の対策や防止・治療」・「積極的生徒指導」＝「全ての子どもの人格的発達を促す」という「生徒指導」を2つの言葉で使い分ける場合があるが、それが持つ問題性は何か？特に近年、「ゼロトレラン

ス（寛容度ゼロ）」的な「生徒指導」が日本中を席捲しつつあり、その中で生徒も教師も生きづらくなっているという現実も語りながら、それらのことをみんなで考えてみたいとして、さらに次のような提起をした。

おとな・教師・学校は、今ある秩序・価値観に子どもたちを埋め込もうとする。それが社会のために、そして当の子どもや生徒のためになると勝手に信じ込んでいるのではないか。

もしそれに従えなかったら、「自己責任」のもとに排除され、精神的・物理的居場所が奪われてしまう現実があるのではないか。

今ある秩序や価値観が、本当に子どもたちのためになっているのか、子どもたちの思いや声が聞き取られたものになっているのか。

子どもの声を聞き取りながら、おとな・教師・学校は、本当にみんなが幸せになれるような秩序や価値観とは何かを問い合いながら、子どもとともにそれを創り出していく必要があるのではないか。

そういう視座がない限りは、「積極的な生徒指導」であれ、「消極的な生徒指導」であれ、結局は、生徒にとっても教師にとってもネガティブな印象しか残らないような教育行為のままであり続けるのではないだろうか。

学校が、「みんながいっしょに幸せになること」を学ぶための場所だとしたら、教師と生徒がともに育ちあえる関係性を含んだ「学び合いの生徒指導」が今、求められているのではないだろうか。それが、今までの「やらざるをえない」生徒指導から、「生き活きとした楽しい」生徒指導への転換を意味するのではないだろうか。

私はこれらの提起の間に、2つほどの実践エピソードを具体的な例として挟んだ。

ひとつは、以前ある研究会の席で聞いたことがある小学校実践。

その実践報告には、担任が朝、教室に行って「おはよう」と声をかけると「死ね」と返してくる小学校2年生の女の子が登場する。彼女は家で虐待を受けていたらしい。子どもたちが発するこうした暴言ともよばれる激しい言葉や汚い言葉は、英語では4文字言葉（four-letter word）に相当すると思われるが、身体や心の痛みを吐き出す際に使われる言葉でもあるという。イギリスの保育園で盛んにこの4文字言葉を使う子どもがいて、やはり家庭で激しい虐待を受けていたという話を聞いたことがある。イギリスの産婦人科病院の中にはこのfour-letter wordが飛び交っているところがあるらしい。出産の痛みを開放するためにそうさせるのだという。

さて、その小学校の担任の先生は、「死ね」と返してくるその子にとってまずは安心できるおとなとして登場するために、暴言をたしなめるよりも、その子の声を聞き取ることから始める。同時に、学級集団づくりを通し、彼女をケアする関係づくりをすすめて、学級を彼女が安心していられる場所に変えていく。そういう中で彼女は、担任の「おはよう」に対し「おはよう」と返すようになったという。

「暴言」と呼ばれるものは「生徒指導」の対象となる行為かもしれない。しかし、その行為自体だけを問題にしても、そういう「暴言」をはかざるをえない子どもの心の痛みへのケアの手が届かない限り、子どもが変わっていくための本当の「指導」にはいきつけないであろう。

もうひとつは、私自身の夜間定時制でのエピソードである。

2学期の始業式の日、高木さんが深刻そうな顔で「先生、相談があ

ります」と言ってきた。放課後、誰もいない教室で高木さんと向かい合った。高木さんは母親と二人暮らし、母親が病弱で失業してしまい、なかなか新しい仕事が見つからないらしい。お金がなくて校納金が納められないから学校をやめたい、そう高木さんは語った。市は生活保護についても認めてくれないという。私が「いっしょに市にかけあおうか」と言ったら、苦笑いをしながら「いいです、いいです」と首を振る。

お金がないから学校をやめるという高木さんに、私は、「それは高木さんやお母さんが悪いんじゃないよ、そういう制度や社会が悪いんだから、やめる必要はないよ」と言った。高木さんの顔は少し明るくなった。私は「大きな声じゃあ言えないけど最終的に校納金は踏み倒してもいいよ」と言った。高木さんはポカンとしていた。でも、ほっとした顔で帰って行った。

翌日元気に登校した高木さんは、私のところに来て「先生、携帯代を節約してお金ためることにしました。学校続けます。」と明るい声で言った。

2年後に高木さんは無事卒業していった。

卒業して3年後、私の離任式に高木さんは駆けつけてくれた。そして5年前のあの時のことを初めて語ってくれた。「先生のあの一言がなかったら自分は卒業できませんでした。本当にありがとうございました。」

「校納金を踏み倒していい」というのは教師としては随分無責任な言葉だろうが、私はその時本気でそう思っていた。お金がなくて学校に通えない、そんな生徒に今まで何人出会ってきただろう。そしてそのことを「自己責任」として押し付けられ本人や家族もそれを内面化している。私は高木さんを「自己責任」の呪縛から解放してあげた

かった。

学生たちの振り返り

- ・生徒指導提要にある生徒指導の定義を見たとき、私が抱いているそれとは異なりポジティブであるという印象を受けた。どの学校もこの定義に基づいて生徒指導を行っているとしたら、服装や頭髪規制はこの定義に反すると思う。人格を尊重したり、個性を伸ばしたいと思うのなら、服装や頭髪は自由にさせるべきである。
- ・みんなが一緒に幸せになること、という文章に疑問を感じました。生徒指導によって得られる幸せが、全員に与えられるものだとは思えません。どうしても生徒指導は手のかかる生徒に偏ってしまうものではないでしょうか。
- ・「生徒指導」は、「生徒」に正しい道を「指」し示し、その方向に「導く」ことが本来の意味だと思うが、実際には「生徒指導」というと教師が生徒に「諭す」意味としてとらえられているように感じる。これには、学校内に教師の暗黙の了解として存在する教師と生徒の従属的關係が存在してるように思った。
- ・実際に先生方は親身になって話を聞いてくれたし、時には自分のことのように心配してくれたし、そういう普段の何気ない瞬間のすべてが指導なのかなと考えを改めました。思い出せるすべての先生が、生徒指導提要にみる生徒指導の意義の内容から外れてはいなかったなと思いました。
- ・生徒指導とは、全てが生徒の健全な成長につながるように教師が行っているものなので、それを邪険にしたり嫌がったりする生徒は御門違いであると思う。「豊かな人間」にみられる本当の豊かさとは何かを常に問いただしながらやっていくことが求められるだろう。

- ・生徒指導，現場と理想がここまでかけ離れていることに驚いた。個性の伸長を目指しているはずが，現場では個性を抑圧し制服を着たマネキンを作ろうとしている。授業では偉い先生方が切磋琢磨して奇をてらったことを，具体的にはアクティブ・ラーニング，生徒の考えや思考力を高めようと，独自の意見を出させる授業を，あたかも生徒の自由を尊重するように行い，それを少し偉い人たちが必死に研究している。それはそれでいいとして，授業以外の指導では，髪は染めるなボタンは開けるな持ち物は制限しますと，旧態依然としたことを行う。上っ面の権威にしがみ付いてないで，まずはそのプレをなくして改めてほんとうのことは何なのか考えるべきだと思う。
- ・今日は生徒指導の本質を聞いた気がした。私はいつも指導＝悪い事を正すことばかりだと考えるのはおかしいのでは？と思っていました。なにもマイナスイメージの修正だけではなくそこからプラスにしていくことこそが生徒を見る，指導することだと改めて認識できました。
- ・非行や問題行動という言葉を出すことは前々からずっと疑問に思っていました。そのような言葉でひとくくりにしていいのかとずっと思っていました。しかし，それは排除の対象じゃなくて，ケアの対象であるという捉え方はとても納得しました。そこが見出せただけでもなにか視点が変わった気がしました。
- ・問題行動をどうとらえるかが生徒の内面を知るきっかけだと思った。意味もなく問題行動をしてるわけではない。その表面だけを見ず，原因を探ることがとても重要だと思った。ただそういった問題行動に向き合うにはかなりの労力と精神力を要するなとも思った。
- ・暴言，万引きなどの問題行動に対し，それは発達段階の環境に何か問題があったのではないかという考え方をもち，ケアすることが大切だ

ということがよくわかったが、それこそ暴言などは教師の精神にも影響を与える。教師のケアという環境も整えなければならないのではないかと思った。

- ・人にやさしくすることや、綺麗なことばづかいを意識するのは、その人の心に余裕があるからだと思う。余裕が無かったり、辛かったりするときは、人のことなんて考えていられないし、周りを気にしたりなんてできないよなとふとおもった。
- ・問題は解決するためにあるのだから、まだ未熟な生徒に対して、成長した大人のように評価していいだろうか。生徒指導では、生徒のケアを重要視して行なうべきだと考える。決して怒りで反応してもなんの解決にもならない。
- ・非行の原因に対してケアすることも重要ですが、非行をする生徒と、他の生徒の間に出来てしまう溝なども生徒からすれば非常に重要だと、自分の経験から思いました。
- ・生徒の非行はある意味チャンスだという考え方は目から鱗でした。自分は塾講師のアルバイトをしているのですが、先生がおっしゃっていたように生徒から暴言を吐かれることがあります。暴言を吐かせてしまう自分に原因があるとは思っていましたが、生徒の内面を覗くチャンスでもあるという考え方を知り、もっともっと生徒に向き合ってあげなければならないと思いました。後ろ向きに捉えず、生徒と接してしていきたいです。

生徒指導や問題行動への向き合い方について様々な視点から意見が寄せられたが、「踏み倒していいよ」についても意見を寄せてくれた学生が何人かいた。

その中には、下のような意見もあった。

- ・踏み倒していいよと言うことは必ずしも正しい訳ではないが、時に、教師は、制度やその類のしがらみから離れて、一個人（人）として、相手のことを考えることが大切だと思った。
- ・心に傷を負っているから汚い言葉を使っていいとは思わない。教師、大人に向かって死ねなどと言ってはならない。それは叱られて然るべきである。学校に通うのに必要な費用を踏み倒していいわけがない。つらくても支払っている人もいるのに、そんな発言ができるなんて権力を過信しすぎである。金がなくて学べないというのは確におかしい。それであれば、募金を呼びかけるなり何か手はあったはずである。そんな1人の生徒に肩入れするような最低な教師にはなりたくないと思った。

後者の意見を寄せた学生は、感情的になるほどに私の出した実践例が彼なりの「正義感」や「倫理観」を強く刺激したようである。と同時に、こういう「乱暴」とも思える意見を出しても、それを受け止めてくれる授業であるというある種の「信頼感」があったのかもしれない。それでも「最低な教師」と言われるのはさすがに私とて気分がいいものではなかった。私の言葉足らずで誤解もあるかもしれないが、反論したい点もある。先に述べたように毎回の授業の冒頭で、前回の授業の学生の振り返りをいくつかピックアップして、応答やコメントを返しているが、この意見をコメントの対象に含めるべきかどうか、しばらく思案に暮れた。私を悩ませたのは、悪く言えばこの意見を出した学生が「晒し者」になってしまうのではないか、という恐れであった。悩んだ末に、この学生が「匿名公開可」で感想を寄せていることにある意味「賭けて」みようと思った。

反論したいことのひとつ、「募金を呼びかけるなり何か手はあったはず」という意見には別の学生が自分の経験を振り返り、以下のようにコメント